

クウェート留学報告

埼玉大学院 人文社会科学研究科 文化環境専攻
真木 ソフィア

私は日本でムスリム移民の子どもたちと接する機会が多く、また私自身が日本で育ったムスリムとして、アラビア語、イスラーム文化についての関心があったことから本プログラムに応募しました。本プログラムに参加の機会を頂き、無事に修了することが出来たことを大変感謝しております。

クウェートは初めて訪れる地でしたが、日本大使館の皆様のご支援により、この一年間、大変有意義な留学生活を送ることが出来ました。本レポートでは、この留学生活について述べたいと思います。

初めてクウェートに訪れて驚いたのは雲のない美しい空でした。そして、同時に空気の悪さも印象的でした。日常生活は車移動のクウェートで、運動不足解消のための外でのランニングは気持ちの良いものではありませんでした。施設は不自由のないほど設備が整っているため、女子寮とは別キャンパスですが、学内のジムを利用することも出来ます。

夏場の天候はとても暑い反面、室内の冷房がとても効いています。授業など長く室内にいととても寒く、一年中冬用のスカーフを持ち歩くなど、暑さのみならず寒さ対策も必要でした。また砂嵐もあり、酷い時は寮内にも砂が入ってきます。砂嵐で喉を痛めてしまうこともあり、マスクや喉のための常備薬を備えていることで大変助かりました。

またクウェートで生活する上で、外国人に対する自由さにも驚きました。クウェートを訪れる前は中東ということもあり、ヒジャブは必須であり、女性が外を気軽に歩くのは難しいと思っていました。しかし、半袖程度の露出は問題なく労働者が良く利用するような市バスを使う事も可能でした。その為、イスラーム文化に興味があった私には何処か物足りなさを感じましたが、イスラーム圏にただ身を置くだけではなく、多くのイスラーム文化に触れるために、ムスリム女性を知るために、自ら彼女たちの生活に触れることが必要であると感じました。寮内には湾岸諸国のアラブ人留学生も住んでおり、一緒に勉強をし、彼女たちの部屋で過ごす事でアラブ人女性の日常や夢、価値観を垣間見ることが出来ました。文化についても各々の国の伝統を良く紹介し合いました。ベールに包まれていた彼女たちの素顔は心を通して初めて見る事が出来ました。

しかしながら、寮内にはクウェート人は住んでいないため、ランゲージセンター以外にも大学内の授業を聴講していたことによって、多くのクウェート人女学生と触れ合う機会を得ました。事前に教授に挨拶をすれば大学内の講義を聴講することも可能であり、アラ

ビア語を勉強している日本人留学生に対してとても好感を持って接してくれます。クウェート人の友人は毎週ある家族の集まりなど様々なアクティビティに招待してくれ、クウェート人家族と共に貴重な時間を過ごしました。

このような日々はクウェートで約1年間過ごしたからこそ経験が出来、彼女たちの本質的な部分に触れることが出来ました。一女性としてムスリム女性の価値観や立場、家族を知る事は大変興味深いものでした。

また多くの外国人労働者やアラブ諸国の方と接する中で、クウェート人との様々な格差を感じました。クウェートで移民が暮らしていくことは決して裕福な暮らしができるわけではないと知りました。外国人に対して自由だと思っていたクウェートでしたが、自由とは何かを考えさせられました。

そして、一番の目的であるアラビア語を学ぶ環境としては、街中では外国人労働者が多いことや、世界中から集まった学生と寮で暮らすことから英語を多く使用します。しかし、もちろん留学生同士でアラビア語を使うことも出来、アラブ諸国の方と知り合う機会に溢れているため、自分次第であると痛感しました。

本プログラムの語学学習を初め、今後の私自身の人生への贈り物となるような日々を過ごす事が出来た留学生活でした。この経験を活かし社会へ貢献出来るよう今後も励んでまいります。